



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	織豊期のキリスト教用語
Author(s)	新谷, 光二
Citation	基督教学, 35, 21-23
Issue Date	2000-07-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46618
Type	journal article
File Information	35_21-23.pdf



織豊期のキリスト教用語

新谷光二

織田信長、豊臣秀吉の時代は1534—1598であり、フランシスコ・ザビエルの来日は1549であった。この時代のキリスト教用語を知る一つの手段として、日本語ポルトガル語辞典(1603)がある。これは日本イエズス会のパードレ(司祭、神父)達によって長崎コレジオ(学林)において編纂されたポルトガル語による日本語辞典である。これはまた邦訳日葡辞書(1980)として岩波から出版されている(以下日葡と記す)。

キリスト教用語はこの時代ラテン語、ポルトガル語が用いられキリシタン(キリスト教徒)のごとく片仮名言葉が用いられた。日本イエズス会は仏教や神道をゼンチヨ(異教徒)の業として排斥する傾向にあったが、これらの宗教用語で一般化されたものはイゲレジャ(教会)で

も用いられた。勿論イゲレジャ独特の語彙も生まれた。

カミ(神)は日本のゼンチヨが尊崇するものだとしてキリシタンはデウスを用いた。一方で、日本語ではテントウ(天道)を用いるのが普通になった。日葡では日本人一般には天道は天の道以外の意味はないとされる。またテンソン(天尊)テンテイ(天帝)がデウスの意味で用いられ、文章用語としてはテンシユ(天主)を使つたと述べている。テン(天)は広くデウスに連なる意味を持ち、テンカンワタクシナシ(天鑑私無し)はゼウスは人によつて分け隔てなく公正に総てをご覧になるという意味として、テンメイヨソムク(天命を背く)はデウスの戒めを破る意味で用いられた。勿論天及び天を含む語彙は中国語の借用である。創造主はゴサクシャ(御作者)とし、イゲレジャ独特の語としている。ツクリヌシ(造り主)の語彙はあげていない。

日葡は日本人が救霊のことをこいねがうイドロ(偶像)としてホトケ(佛・釈迦)には注目するが、ミコト(尊)には意を用いない。

因みに印欧比較言語学ではZeus (Deus) は輝き、天

空に語源を持ち、God は呼び出す、すなわち祈りに語源を持つ。ユーラシア比較言語学¹⁾(拙論をもつて嚆矢とする)ではカミは死者の霊の語源をもち、万葉集では虎というカミとか、大口のマカミ(狼)とか人間に害を与える存在としても現れる。

イノリ(祈り)も日葡ではイドロの祈祷とし、祈祷や呪術をもつて呪う意味とする。信仰と敬虔の念で行う祈祷はキネン(祈念)であるとする。更にトナエ(唱え)を今日の祈りとしている。クルスノモンヲトナユル(クルスの文を唱ゆる)は十字をさることを、コンタナドヲトナユル[コンタ(ロザリオの祈り)等を唱ゆる]は天使祝詞等を唱えた数を珠によって数えることを意味した。キリスト教の重要な教理の一つであるアイ(愛)を日葡では見出し語としておらず、コイ(恋)もよこしまな慕情としクリシタンの宗教的立場から肉欲の禁を説いている。今日のアイ(愛)一般はタイセツ(大切)を当てていて興味深い。タイセツニモユル(大切に燃ゆる)、タイセツツックス(大切を尽くす)等の用例を挙げている。またオボシメス(思し召す)を愛する意味とし、ゼ

ンニンタチハセカイヲデウスニオボシメシカエラレタ(善人たちは世界をデウスに思し召し換えられた)の文例をあげ、サントス(聖人)たちは現世よりもデウスを愛されたという意味だとしている。一方前述の如く儒教の教えであるジン(仁)に理解をよせ、自らを忘れ、他を愛して、危うきを救い、極まれるを助け、総て物に情を先とし、事に触れて憐れみの心の有ることと解説している。これはイエズスの愛に通じる。また仏教用語でもあるジヒ(慈悲)をポルトガル語のミゼリコルジア(慈悲)に当てジヒヤ(慈悲家)は修道院付属の救護所をジヒバコ(慈悲箱)は献金箱の意であるが見える。献金の仕方に触れて、慈悲箱に金を撒き入れるとあり、考えさせられる。イゲレジャに寄付をすることはキシン(寄進)と呼び、それをホウモツ(捧物)ともいう。イドロに対しては奉加であり、賽銭などはゼンチョの言葉とされている。

日葡は教義をテキデン(的伝)とよび、アポストロ(使徒)たちがキリストから受けた教え、クリシタンがアポストロから授けられた教えと説明している。罪の赦

しは今日同様スクイ（救い）でありユウメン（宥免）も見える。イゲレジャのインダルゲンシャ（贖宥）のような誰にでも与えられるものではない特別の大きな赦免をヒジョウノタイシャ（非常の大赦）と呼ぶとしている。

パライズ（天国）はゴクラク（極楽）といい、ゴシヨウゼンシヨ（後生善所）といって死後の住処とし、パライズの歓喜をジヨウラクガジヨウ（常楽我浄）とするなど仏教用語の一般的なものも借用されたことは前述した。インフェルノ（地獄）はジゴク（地獄）、ナイリ（泥犁）と呼んだ。クワウセン（黄泉）はゼンチヨの考えている地下にある死んだ者の魂の行きつく所だとされる。

カミ（神）をめぐる討論で、天主は天の主であるとしたが、日本語については言語学（狭義には語源学）が確立されておらず、従って神の意味（語源）も確かではないこと、私見としては前述の如くであることを述べた。

〔注〕

(1) 新谷光二著「唇の謎恋の懸け橋」共同文化社（札幌）1996など